

第IV章 総 括

1 調査のまとめ

1) 遺 構

今回の調査では、テラス 83 基(推定テラス 16 基含む)、墓域 8 基、石垣 85 基、石段 5 基、石列 7 条、道 9 条、井戸 5 基、池 3 基、水路 2 条を検出した。

調査は地表面での確認に限定されたが、寺碑・墓石などの石造物や、石列・井戸・池・水路などの遺構の分布状況から、各寺院の範囲や位置関係の検討を行った。その結果、日蓮宗寺院は調査区南西部から東部の上位斜面に(覚性寺：テラス 1～3、妙伝寺：テラス 4・6～10・墓域 84、法久寺：テラス 18～26・墓域 85～86、妙法寺：テラス 27～41)、臨済宗寺院は調査区北東部の下位斜面(興禅寺：テラス 42～44・墓域 87)、浄土宗寺院は調査区北部の下位斜面(源昌寺：推定テラス 79～80、西光寺：テラス 47～48)にそれぞれ位置しており、江戸中期の延享 5 年～宝暦 7 年(1748～57)の絵図資料(第●図)とほぼ一致することから、享保 2 年(1717)に妙伝寺が妙円寺跡地に移転した以降の、上寺町地区最大の寺院数(8カ寺)を誇った時期の状況が良好に残っているといえる。

また、妙伝寺(テラス 6)、法久寺(テラス 22)、興禅寺(テラス 44)、西光寺(テラス 48)では、境内地の手掛かりとなる池・井戸・石列(建物基壇)・水路などが、妙伝寺や妙法寺では、境内地内を結ぶ道(道 2・3・7)などを確認することができた。

このほか、近世の鉱山関係の作業場や居住地と想定されるテラス群(テラス 12～16、49～53、60～63)、近代の鉱山労働者の寄宿舍であった大塚部屋の跡地(テラス 58・59)、各寺院から独立して存在する墓域群(墓域 89～91)、寺院間や町々をつなぐ道(道 1・4～7・9)などが検出され、寺院を主体とするものの、それ以外の鉱山関連の施設や住居も存在していたものと考えられる。

2) 遺 物

今回の調査では、56 点の土器・陶磁器類を表採した。

このうち、最古のものは 16 世紀末～17 世紀前半にかけての中国産や肥前系の陶磁器類で(5・11～15)、いずれも日蓮宗妙法寺跡から検出されている。このほか、19 世紀に下る仏花瓶(9)や陶磁器類(6・8・10)も確認されており、遺物の上からも妙法寺の寺院としての性格と、寛永元年(1624)～明治元年(1868)の存続年代を裏付けることができると考えられる。

また、臨済宗興禅寺跡からは、17～19 世紀代の陶磁器類が表採されており(16～19・21)、慶長 16(1611)年の開基から昭和 2 年(1927)の廃絶状態に至るまでの長期にわたる存続期間を示唆している。なお、テラス 44 からは軒平瓦(20)が検出されており、石列を伴う基壇状遺構とともに、寺院関連の建物の所在を示す物証として注目される。

覚性寺・妙伝寺・法久寺・西光寺からは、寺院の存続期間の下限に関連する 19 世紀代の陶磁器類が検出されている(1～4・22～26)。また、大塚部屋跡からは、18 世紀中葉の肥前系磁器碗が確認されており、明治 26 年(1893)に大塚部屋が移転してくる以前の、近世の佐渡奉行所地役人屋敷(黒田氏・滝沢氏)に

伴う遺物と想定される。

なお、妙伝寺跡のテラス 10 には、17 世紀代の越前産の大甕が埋設されており、享保 2 年（1717）の妙伝寺移転前に所在していた妙円寺（元禄 8 年 [1695] 以前に上相川から次助町へ移転し享保 2 年に南沢へ再移転）との関係性がうかがえる。

3) 調査結果の検討と今後の課題

以上、現地での調査結果をもとに、今後の課題についてまとめてみたい。

今回の調査によって、上寺町地区で最も多い 8 カ寺が存在していた享保 2 年（1717）以降の寺院配置や、現存している遺構・石造物等の分布状況はほぼ明らかになったが、各寺院の寺域や変遷等についてはまだまだ検討の余地があると考えられる。

そのひとつの指標となる史料が、『佐渡国寺社境内案内帳』[山本 1974]・『佐渡相川志』[田中編 1968]・『佐渡名勝誌』[新潟県立佐渡高等学校同窓会 1997]・『相川町誌』[相川町役場 1927] にみえる各寺院の境内地の面積と来歴である。

以下、各寺院ごとに、史料の記述と現地での調査結果について検討する。

①万照寺（浄土真宗）

江戸時代の史料では、境内 15 間 11 間（ $\approx 27.3\text{m} \times 20.0\text{m}$ ）、5 畝 5 歩～15 歩（ $\approx 511.5\text{m}^2 \sim 544.5\text{m}^2$ ）となっているが（史 4-1～3）、昭和 2 年（1927）時点では 3 畝 7 歩（ $\approx 320.6\text{m}^2$ ）に減少しており（史 4-5）、現在の本堂と墓地を合わせた面積とほぼ一致する。

当寺は、元禄年間（1688～1704）に証誠寺と浄願寺が併合して万行寺になった際に現在地に移転し、その後昭和 17 年（1942）に専照寺と合併して万照寺となっており、境内の規模は元禄年間の移転からほとんど変わらずに現在に至っているといえる。

②覚性寺（日蓮宗）

史料では、境内 6 間 7 間（ $\approx 10.9\text{m} \times 12.7\text{m}$ ）、1 畝 12～13 歩（ $\approx 138.6\text{m}^2 \sim 141.9\text{m}^2$ ）となっており（史 6-1～3）、それほど大きな寺院ではなかったことがわかる。

現在の覚性寺碑の眼前にあるテラス 2 とほぼ同一の面積であることから、テラス 2 が境内地の中心と想定されるが、地表面には寺の痕跡を示す遺構・遺物の存在は確認できなかった。

③妙伝寺（日蓮宗）

史料では、22 間 44 間（ $\approx 40.0\text{m} \times 80.0\text{m}$ ）、2 反 8 畝～3 反 2 畝 8 歩（ $\approx 2,772\text{m}^2 \sim 3,194.4\text{m}^2$ ）とある（史 9-1～3）。

今回の調査で検出されたテラス 6～11 及び墓域 84 一帯の面積とほぼ相違ないことから、寺院に付随する池・井戸などの遺構や墓地が現況で確認できる範囲が、そのまま妙伝寺の境内地にあたると想定される。

石造物については、林氏・張原氏（テラス 11）、小池氏・松田氏・小室氏（墓域 84）の記銘を持つ墓石を確認したが、階級や職業については不明である。また、妙伝寺檀家として記録にみえる浅原氏 [相川町史編纂委員会 1995] の墓地も未確認である。

なお、当寺はまず寛永 6 年（1629）に上相川から上寺町の日蓮宗妙法寺の上の台地に移転し、いったん大工町北側の下大坂町に移り、享保 2 年（1717）に現在地に入るという複雑な経歴を持っている。元禄 7 年（1694）と翌 8 年の絵図（第●・●図）には、妙法寺の北東に下大坂町へ移る前の妙伝寺が描かれており、今回の調査で妙法寺の北東に大型のテラス 33 を検出したが、地表面からは妙伝寺に関する明

1 調査のまとめ

確な遺構・遺物は確認できなかった。また、享保2年まで当地に所在していた妙円寺についても、鶴子四十物町から当地へ移ってくる時期については、これまで明確な記録は存在していなかった。しかし今回の調査で、妙円寺時代の元禄7年(1694)の記銘を持つ墓石や(テラス9)、17世紀代の越前産の大甕(テラス10)が確認されていることから、今後詳細な石造物調査や発掘調査等を行うことで、妙伝寺のかつての所在地や妙円寺の移転年代、両寺院の檀家の性格などの解明が進むものと考えられる。

④法久寺(日蓮宗)

江戸時代の史料では、境内10間13間(≒18.2m×23.6m)、1反歩(≒991.7m²)となっているが(史9-1～3)、間数の数値(10間×13間≒429.5m²)と面積の数値とでは倍以上の開きがある。また、昭和2年(1927)の記録では、それ以外に財産として田1町2段3畝20歩(≒12,264.5m²)、畑1段7畝26歩(≒1,771.8m²)、山林1段9畝20歩(≒1,950.4m²)を所有していることになっている(史9-4)。

今回の調査では、テラス22において寺院に関連すると想定される石列・井戸・池などの遺構が検出されており、上記の江戸期の面積と照らし合わせると、面積上の境内地の数値(1反歩)とテラス22の面積がほぼ一致することが判明した。しかし、テラス18～21・23・24や墓域85・86など、法久寺に付随する墓碑や墓地も確認されており、記録上の境内地よりも広い寺域を持つと想定される。よって、史9-4に記載されている田・畑・山林といった財産地を含んだ範囲が事実上の法久寺の寺域と考えられるが、昭和17年(1942)に法久寺は下寺町の法輪寺に合併して廃寺となり、かつ土地の名義も法久寺から個人等へ変更されているため、法久寺の範囲を特定することは困難であることから、テラス22を中心として法久寺に関する墓碑や墓地が確認されたテラス・墓域を法久寺の寺域とした。

なお、石造物については、これまでの調査で宝暦13年(1763)の法久寺碑(テラス18)、享保8年(1723)の相川最古の心中の墓(墓域85)、佐渡奉行所地役人であった佐藤氏一族の墓地(テラス24)の存在が知られていたが[相川町史編纂委員会1973、佐藤ほか2004]、今回の調査で、法久寺の歴代僧侶や中村氏・岩崎氏・川野氏の銘を持つ墓石を確認した(テラス20・21・23・墓域86)。このうち岩崎氏・川野氏は、法久寺檀家の佐渡奉行所地役人として記録上にみえる人物であり、その墓地が実在していることが明らかとなった。

⑤妙法寺(日蓮宗)

史料では、境内32間25間(≒58.2m×45.5m)、2反6畝20歩(≒2,640m²)とある(史10-1～3)。

今回の調査では、寺院本体に係る遺構は検出できなかったが、テラス34において妙伝寺檀家である佐渡奉行所地役人の内田氏一族の墓地を確認した。また、内田氏と同じ佐渡奉行所地役人伊沢氏の墓地がテラス35に所在し、妙法寺碑と歴代僧侶である十二世、邑上氏・本間氏の記銘がある墓石がテラス40で検出されたことから、調査区北東部で最大の面積を誇るテラス34を中心に妙伝寺の寺域が展開していると想定される。

このほか、テラス28～32においても墓石群が認められ、テラス29には歴代僧侶と想定される十世・十一世と持田氏一族の墓地が所在する。また、テラス38には増山氏の墓地があり、その南東の斜面上にも墓石が散在し(墓域87)、テラス27・37・39も妙法寺墓地に隣接することから、今回の調査では妙法寺の範囲としたが、これらを含めると史料上にみえる境内地の面積を超えることから、寺域の確定には今後更なる調査が必要であると考えられる。

⑥興禅寺(臨済宗)

江戸時代の史料には、境内55間46間(≒100.0m×83.6m)、3反8畝10歩(≒3,795m²)で、うち

本堂は7間半11間半(≒13.6m×20.9m)、そのほか1反3畝26歩(≒1,375.1m²)の畑を所持しており(史11-1～4)、上寺町地区では2番目の面積となる。しかしその後、次第に檀家が減少して管理が行き届かなくなると、その土地は奸徒に騙し取られ、昭和2年(1927)当時で5畝5歩(≒511.5m²)にまで減少し、寺基も廃顔しつつあったという(史11-5)。

今回の調査では、テラス44において興禅寺に関する建物基壇と想定される石列群が確認されており(基壇1・2)、両者を一連のものとして計算すると、史料にみえる本堂の数値とほぼ一致することから、テラス44に興禅寺本堂が所在していたと考えられる。また、昭和2年当時の境内地とテラス44の面積も類似していることから、最終的には興禅寺の境内地は本堂のあるテラス44に減退したことがわかる。

しかし、江戸時代の境内地については疑問点が多い。まず、史料上の面積について、史11-2には尺度では55間46間、面積では3反8畝10歩とあり、そのとおりに計算すると、尺度では約8,360m²となるのに対し面積では3,795m²と、倍以上の開きがある。また、地形図上で興禅寺周辺のテラスを探ってみても、先述の妙法寺の境内地を除くと、東に位置するテラス33以外には目立ったテラスは存在せず、北を流れる桐ノ木沢の水害による斜面崩落の可能性を考慮しても、55間46間(≒100.0m×83.6m)に及ぶ広大な境内地が存在していた可能性は低いと考えられることから、面積上の数値の3反8畝10歩(≒3,795m²)を基準に今後興禅寺の寺域について検討していく必要がある。

石造物については、テラス44から西村氏・日向氏、墓域88から高木氏の記銘のある墓石が検出されており、このうち西村氏については、史料上にみえる興禅寺檀家の佐渡奉行所地役人の記載と一致することが判明した。西村氏以外では、本間氏、赤江橋氏、矢渡氏、太田氏といった地役人が檀家であったことが知られているが、今回の調査ではその墓地は確認できなかった。

なお、テラス45の西約20m、道9の西斜面上に、佐渡奉行所地役人の倉本氏の墓碑があり(墓域89)、宝暦3年(1753)8月に5代目藤右衛門が奥州(現福島県)半田銀山の役人に命じられ、天保13年(1842)8月に藤右衛門の子孫にあたる半田銀山役人の藤太郎賢俊が墓碑を建てたことが記されている。これに関連する記事が佐渡奉行所の記録書に残されており、藤右衛門は半田へ移住した翌年の宝暦4年8月に38歳の若さで病死し、泉田村の禅宗泉秀寺に葬られたという[新潟県立佐渡高等学校同窓会1985]。この泉秀寺は、福島県伊達郡国見町に現存している曹洞宗寺院で、聞き取りでは残念ながら倉本氏の墓地や資料等は残っていないとのことである。上寺町地区では曹洞宗寺院の存在は確認されていないが、同じ禅宗である臨済宗寺院は、正保3年(1646)に廃寺となった慈徳寺を除くと宝暦3年時点では興禅寺しか残っていないことから、倉本氏は興禅寺の檀家であった可能性があり、天保13年の時点で先祖の菩提を弔うために、興禅寺にほど近い当地に藤太郎が墓碑を建立したものと推測される。

⑦源昌寺(浄土宗)

史料では、境内11間13間(≒20.0m×23.6m)、4畝23歩(≒471.9m²)とあり(史13-1～3)、今回の調査で寺域と判断した推定テラス79・80よりもやや広い面積となっている。

実際には、北を流れる桐ノ木川の氾濫で、斜面の崩落や土砂の埋没等により現地地形が変化しており、境内地を特定することは困難であると想定されるが、平成19年(2007)の補足調査で確認された石垣等の状況を再確認するためにも、今後追加調査を実施する必要があると考えられる。

⑧西光寺(浄土宗)

史料では、境内23間54間(≒41.8m×98.2m)、3反9畝8歩～18歩(≒3887.4～3920.4m²)とあり(史14-1～3)、上寺町地区では最大の面積を誇る。

1 調査のまとめ

No.	宗派	寺院名	所在地	境内面積	開基年代	合併・移転年代	廃寺年代
1	浄土真宗	万照寺	諏訪町鈴坂※1・2 諏訪町※3・4	15間11間(≒27.3m×20.0m)※2 5畝15歩(≒545.5m ²)※1・3 5畝5歩(≒512.4m ²)※2 3畝7歩(≒320.7m ²)※4	元和5年(1619) 銀山町に万照寺の前身の 安楽寺と誠証寺が開基	①元禄年間(1688～1704) 安楽寺と合併した誠証寺(銀山町)と 浄願寺(次助町)が合併して万行寺(諏 訪町)となる ②昭和17年(1942) 万行寺と専照寺(上相川)が合併して 万照寺となる	
2		浄願寺	次助町※2 (不明)		不明	元禄年間(1688～1704) 誠証寺(銀山町)と合併して万行寺(諏 訪町)となる	
3		覚性寺	次助町※1・2	6間7間(≒10.9m×12.7m)※2 1畝13歩(≒142.1m ²)※1・2 1畝12歩(≒138.8m ²)※3	寛永7年(1630) 上相川上山ノ神町に開基	元禄年間(1688～1704) 上山ノ神町から次助町へ移転	明治元年(1868)
4		妙円寺	次助町※1・2 次助町字禰畑※4		慶長元年(1596) 鶴子四十物町に開基	①不明 鶴子四十物町から次助町へ移転 ②享保2年(1717) 次助町から南沢町へ移転	
5	日蓮宗	妙伝寺	上寺町字禰畑※1 次助町禰畑※2 上寺町※3	22間44間(≒40.0m×80.0m)※2 3反2畝8歩(≒3,200.0m ²)※1・2 2反8畝(≒2776.9m ²)※3	慶長9年(1604) 上相川岩崎町に法華堂が 開基	①寛永6年(1629) 寺合妙伝寺と改め、岩崎町から妙法寺 の上へ移転 ②不明 妙法寺の上から大工町北側の下大坂町 へ移転 ③享保2年(1717) 下大坂町から次助町の妙円寺跡地へ移 転	明治元年(1868) その後、明治26年 (1893)に福島県磐城 (現伊達市)へ移転
6		法久寺	上寺町字境沢※1・4 次助町境沢※2 上寺町※3	10間13間(≒18.2m×23.6m)※2 1反(≒991.74)※1～4 その他財産地※4 田1町2反3畝10歩(≒12,231.6m ²) 畑1反7畝26歩(≒1,771.9m ²) 山林1反9畝20歩(≒1,950.4m ²)	元和8年(1622) 上相川岩崎町に法円寺が 開基	寛永6年(1629) 岩崎町から次助町の現在地へ移転	昭和17年(1942) 下寺町の妙輪寺に併合 され妙法寺となる
7		妙法寺	上寺町樋道※1 次助町樋道※2 上寺町※3	32間25間(≒58.2m×45.5m)※2 2反6畝20歩(≒2,644.6m ²)※1～3	寛永元年(1624) 次助町に開基		大正14年(1925) 山形県小国町へ移転
8	臨濟宗	興禅寺	次助町桐ノ木沢※1・4 桐ノ木沢※2 相府桐木沢※3	55間46間(≒100.0m×83.6m)※2 3反8畝10歩(≒3,801.7m ²)※1～3 5畝5歩(≒512.4m ²)※4 本堂※2 7間半11間半(≒13.6m×20.9m) その他財産地※1～3 畑1反3畝26歩(≒1,375.2m ²)	慶長16年(1611) または慶長19年(1614)	元禄7年(1694) 正保3年(1646)に廃寺となった慈徳 寺の畑1反3畝26歩を支配	昭和2年(1927) 廃寺状態
9		慈徳寺	境沢※2 (不明)	16間26間(≒29.1m×47.3m)※2	不明		正保3年(1646)
10	浄土宗	源昌寺	庄右衛門町桐木沢※1 次助町桐ノ木沢※2 上寺町※3	11間13間(≒20.0m×23.6m)※2 4畝23歩(≒472.7m ²)※1～3	慶長12年(1607)		不明 昭和2年(1927)時 点で廃寺状態
11		西光寺	次助町※1 上寺町※3	23間54間(41.8m×98.2m)※2 3反9畝8歩(3,894.2m ²)※1 3反9畝18歩(3,927.3m ²)※2・3	元和元年(1615)		慶応3年(1867) 火事により焼失し源昌 寺へ併合
12	不明	教福寺	諏訪町※2		不明		不明

出典：※1『佐渡国寺社境内案内』※2『佐渡相川志』※3『佐渡名勝志』※4『相川町誌』

第4-1-1表 上寺町地区寺院変遷表

今回の調査では、西光寺に関係する石造物が残るテラス48と、北東に隣接するテラス47を寺域として判断したが、史料上の面積から推察すると、この2基のテラスだけでは面積が不足する。石段3の北西、道9の北には、西光寺に関連すると思われる墓石があり(墓域91)、さらに道9を挟んだ北側斜面には、井戸や石垣を伴うテラス群が展開していることから(テラス49～53)、西光寺の寺域はさらに北側へ拡大する可能性がある。

石造物については、テラス48で歴代住職の墓石のほか、山本氏・前川氏の墓地を確認したが、人物像の特定はできなかった。

以上、今回の調査では、これまでの調査成果や文献史料等との比較検討を踏まえ、上寺町地区の寺院の来歴や、最大の寺院数(8カ寺)となった享保2年(1717)以降の位置関係、遺構・石造物等の分布状況が把握できたことが大きな成果であったといえる。しかし、地表面からの調査にとどまっていることもあり、次節で現時点で確認できる墓石の形式や銘文などの整理を行っているものの、各寺院の詳細な寺域や遺構の年代、被葬者の性格等については、今後さらに発掘調査や石造物調査等を進めながら明らかにしていく必要があると考える。